

1 1月16日（日）主日礼拝レジュメ

「人に従うのか、神に従うのか」 使徒の働き 5章 27～32節

28節「あの名によって教えるはならないと厳しく命じておいたではないか。」は4章18節に「そこで、彼らは二人を呼んで、イエスの名によって語ることにも教えることも、いっさいしてはならないと命じた。」を指している。

「それなのに、何ということだ。おまえたちはエルサレム中に自分たちの教えを広めてしまった。」広めると訳されている言葉は、「満たす」という意味がある。エルサレム中で使徒たちの教えを聞いたことのない人は誰もいないのではないかというほどに、使徒たちの教えはエルサレム中に広まっていた。「あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしている。」＝イエスの死の責任が自分たちにあると責め立てている。しかし、大祭司たちは、イエスを処刑した時の自分たちの手続きには何の問題もなく、イエスは自分の罪をさばかれ、十字架につけられて死んだのだと主張し続けていた。むしろ彼らが恐れたのは、民衆によって自分たちが責め立てられ、自分たちの権威や評判が貶められることを恐れていた。自分たちの罪を悔い改めたり、使徒たちのメッセージを聞いて自分たちのしたことを顧みることは決してなかった。

29節は、4章19,20節の繰り返しのように見えるが、「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい。」(20節)との明確に示された主のみこころとしての命令に従わないわけにはいかないということであった。「従うべきです」と訳されている言葉は、どうしてもそうしなければならない、従う義務があるというような意味がある。これこそがまさに使徒たちの信仰であった。

30節でペテロと使徒たちは、再び神がイエスを死からよみがえらせたことを語ります。大祭司に、「私たちの父祖の神」と言う。つまり大祭司も、

同じ父祖、アブラハム、イサク、ヤコブを持つユダヤ人であり、その神がイエスを死からよみがえらせたということ。また、使徒たちははっきり「あなたがたが木にかけて殺したイエス」とユダヤ人指導者たちの罪を明らかにする。イエスは本当に木にかけられ、のろわれた者として死ななければならないような罪を犯したのか。

31 節で、「このイエスを導き手、また救い主としてご自分の右に上げられました。」と言う。導き手=支配者とか特別な地位を授けられた者。これは、神が持っている権威を神の右の座においてイエスがともに共有しているとも言える。そこから、もう一度来られてすべての者をさばかれる。その一方で、救い主としてとも言う。イエスは、政治的メシヤではなく、イスラエルを悔い改めさせ、罪の赦しを与える救い主。神は、まずイスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えることをみこころとされ、すべてのユダヤ人に使徒を通してメッセージを語り続けている。それは、罪あるイスラエルを愛するゆえ。

32 節で使徒たちは、「私たちはこれらのことの証人です。」と言う。(3 章 15 節参照) それとともに「神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊も証人です。」と言う。ペンテコステの日に聖霊が下り、彼らが聖霊に満たされた時に、彼らはキリストの十字架と復活と昇天の意味をはっきり知った。聖霊の証しを通して使徒たちは確信をもって十字架につけられた救い主イエスを宣べ伝え、イスラエルの民に悔い改めによる罪の赦しを宣べ伝え続けている。

私たちもその聖霊に満たされ、聖霊の導きに従い、聖霊から常に真理に導かれながら歩んでいるだろうか、私たちの歩みも使徒たちのように、神のみこころにかなった歩みとして、聖霊が証ししてくださるだろうか。